

# 現代英語を考える（中一その1）

D. Crystal 著

金野 伸雄 抄訳注

## 5. 前置詞をどこに置くか？<sup>(1)</sup>

<sup>(2)</sup>  
これは、前置詞 (preposition) に関する問いであって、国家の状態に関する問いではない。いや、あまり唐突に話を切り出すべきではないかも知れない。というのも、私の経験からいって、前置詞という言葉に対しては、人々が戸惑いを覚える傾向があるからである。この言葉は、名詞 (noun) や動詞 (verb) ほど概念がはっきりとはしていないのである。ある女性の方が次のような投書を寄せられた。

I have never been able to assimilate so much as the rudiments of grammar. Countless times my daughter has explained the difference between a noun and a pronoun, a verb and an adverb. I always say 'Thank you darling, I think I have it now'. But within minutes I've forgotten again. To me, a preposition was always the placing of one's left foot in a stirrup, before throwing one's right leg over the back of a horse.

私は、文法のごく初歩的なことでさえ、ちゃんと理解できません。名詞と代名詞、動詞と副詞の違いについて、これまで私は幾度も娘から説明をうけてきました。そのたびに「もうわかったように思うわ、ありがとう」と礼を言うのですが、またしばらくすると忘れてしまうのです。私にとって、preposition というのは、いつも、右足で馬の背をまたぐ前に鐙 (あぶみ) に左足をかける動作のことだったのです。

この投書子は前置詞の定義をご存知でなかったのかも知れないが、それを使いこなす技術は立派にお持ちになっていたことは、明らかである。この投書中の最後の文(sentence)をとりあげてみよう。この中には、立派な前置詞が6種類も使われている。

to me                      of one's left foot            in a stirrup  
before throwing        over the back                of a horse

それで、これらの前置詞はどのような働きをしているのであろうか。

Foot *in* the stirrup?      Leg *over* the back?      Back *of* a horse?

前置詞の主な機能は、語 (word) と語あるいは句 (phrase) と句を結びつけて、ある特殊な意味を創り出すということである。どのような意味なのか。前置詞が創り出す最も一般的な意味は、時間と空間に関係がある。In と over は共に空間概念と関係のある前置詞である。Before は時間概念と関係がある。さらに、これ以外の意味も表現可能である一たとえば、of は<所有>概念を表わすなど。

前置詞の一覧表を作成する1つの方法は、先ほど紹介した前置詞のどれか1つを含む文

をとりあげて、その前置詞の使われている場所に入りうる他のすべての語を、みつけてみることである。どれも同様に前置詞であろう。たとえば、次の文をとりあげてみよう。

**There was an awful noise on the bus.**

バスの中は、ひどくがやがやしていた。

On にかえて、どの様な語を使いうるだろうか。Under, near, behind, in, by, in front of...

前置詞は殆どが1語である。In front of のように、2ないし3語で成り立っているものもわずかならある。この様な例を他にいくつか示そう。

**along with, out of, because of, in charge of, in accordance with**

ひとことというならば、とても便利な品詞だということなのである。では、人々をまごつかせる原因は、どこにあるのだろうか。

使う場所が分からないというところに、原因があるのである。

これまで300年近くにわたり、一般的な文法書や文体を扱ったテキストでは、文中のどこに前置詞を置くかという問題に、多くのページが割かれてきた。もちろん、**the placing of one's left foot in a stirrup** (鞍あぶみに左足をかけること) のような、選択の余地のない場合のことではない。A stirrup in という語順はありえないからである。次の例のように、文末に前置詞が出現する場合についてのみ、この問題が生じるのである。

**There's the town John went to.**

あそこに、ジョンの行った町がある。

**Have you found the bag you were looking for?**

捜していらしたバッグ、わかりましたか？

ある投書子は、前置詞で終わる文は ugly (醜い) だと評している。また、他の多くの投書では awkward (ぎこちない) とも評されている。17世紀英国の詩人ジョン・ドライデン (John Dryden, 1631—1700)、この詩人にはまた英文法に関する著述もあるが、彼は not elegant (洗練されていない) と評している。

いま、私はジョン・ドライデンの名前を引き合いに出したが、それは、彼が前置詞のこのような使い方に当惑を覚えた、最初の作家であるように思われるからである。実際、ドライデンはこの用法の誤りを認識すると、過去の自分の文章の多くに手を加え、前置詞を動かすという徹底ぶりであった。たとえば、

**the age I live in**

を、彼は次のように書き改めた。<sup>(5)</sup>

**the age in which I live**

間もなく、この問題は他の文法学者の注目を浴びることとなった。とくに、18世紀後半英国の学校で使用された文法書の著者であるリンドレイ・マリー (Lindley Murray, 1745—1826) に、強い印象を与えたのである。彼は、自分のまとめた文法規則の中に、この問題に対する助言を組み入れ、それに他の作家が従ったのである。学校で生徒達は、幾世代にもわたってこの規則を教え込まれ、それが殆どの教養ある大人の言語態度の一部になっ

たのである。

今日では、事情は異なってきている。学校の生徒達は、前置詞をどこに置くかは言うに及ばず、それが如何なるものなのかということさえ、習ったことのない場合もあるのである。従って、ふつう、彼等はこういう問題を意識することはないのである。ある意味では、しあわせなことである。取り組まなければならない、もっと重要な問題の多いこの世の中で、その分だけ苦勞の種が少ないからである。使う位置を誤った前置詞の問題を同じように知らなかった、ドライデンの時代より前、即ち17世紀初期の子供達と比べて、現代の子供達の状況が悪化しているわけでは、決してない。

まずその規則を作ることが必要であると、ドライデンが考えたのは一体なぜなのか。

ドライデン自身がどのような態度で英文法を学ぼうとしたかを調べてみると、1つの事実がきわめて明瞭に浮かびあがってくる。彼の研究法は、完全にラテン語 (Latin) 文法に基づいていたのである。当時の教養人にはだれでもラテン語の知識があり、英語について論ずるために、彼らは分離不定詞 (split infinitive) の場合のように、ラテン語文法の用語や技術を用いたのである(第2章参照)。言語的な卓越性及び洗練の典型と考えられていたラテン語の基準によって、英語という言葉を判断しようとさえした人が多かったのである。

ところで、ラテン語の場合、文末に前置詞が現われることは滅多にない。この事実をとらえて、ドライデンや他の文法学者は、「ラテン語にないのだから、英語でもあってはならない」と考えたのである。彼らにいわせれば、このようにラテン語の規準に沿わない文は、洗練度にも、文体的な力強さにも欠けるというのである。だから、前置詞で終るような文は作るべからず、ということなのだ。そういうわけで、投書子のチャムリイ・マイナ (Cholmondley Minor) さん、あなたは何度も何度も書き直しなさいませぬ…

しかしながら、前置詞で終る文が文体的に弱い、或はぎこちないと感じられるというのは、本当のことなのであろうか。確かに、ラテン語の場合はその通りであったかも知れない。それとはかなり異なった原理ででき上った言語である英語についても、同じ事がいえるのだろうか。

実際には、必ずしもそうであるとは限らない。網を投げて用例を蒐集してみるとよい。そうすれば、前置詞の配される場所として、文末のみが自然で、しかも慣用的な場所である用例が、容易にみつかるであろう。たとえば、次のような例を拾いあげることができよう。

What are you going to cut down on?

あなたは、何をきりつめようとしているの？

ひどく学者ぶった人物以外、だれが次のような言い方をするだろうか。

Down on what are you going to cut?

ここで、サー・ウィンストン・チャーチル (Sir Winston Leonard Spencer Churchill, 1874—1965) と、この章の標題にご登場願おう。チャーチルはある時、次のような書き込

みをしていっただけだ。これは、前置詞が文末にくるのを避けた、ぎこちない文<sup>(9)</sup>に言及したものである。

This is the sort of English up with which I will not put.

これは、私には我慢ならない英語だ。

逆に極端な例として、前置詞の大部分が文末に現われるような文を作る競争も、行なわれた。サー・アーネスト・ガウズ (Sir Ernest Gowers, 1880—1966. H.W. Fowler の *A Dictionary of Modern English Usage* (1926) を1965年に第2版として改訂したことで知られる) の文体の手引書である *Plain Words* の脚注のなかに、その最も特長的な例が出現する。

What did you bring that book I don't like to be read aloud to out of from up for?<sup>(9)</sup>

さらに、1947年、雑誌ニューヨーカー (*New Yorker*) のために、アメリカの詩人モリス・ビショップ (Morris Gilbert Bishop, 1893—1973) の作った、次の詩を引用する著者も何人かいる。

I lately lost a preposition ;  
It hid, I thought, beneath my chair  
And angrily I cried, 'Perdition!  
Up from out of in under there'.

Correctness is my vade mecum,  
And straggling phrases I abhor,  
And yet I wondered, 'What should he come  
Up from out of in under for?'<sup>(9)</sup>

また、これは近代的な傾向とは言えない。ドライデン以前 (B. D.) から前置詞で終る文は存在し、ドライデン以降 (A. D.) もそれが続いたのである。前置詞のこのような使い方は、あらゆる二流作家のみならず、あらゆる一流作家にもみられる。たとえば、英語という言語で書かれた言葉 (speech) のなかで、おそらく最も有名なものと考えられる、次の言葉が思い起こされる。

Who would fardels bear,  
To grunt and sweat under a weary life,  
But that the dread of something after death,  
The undiscovered country from whose bourn  
No traveller returns, puzzles the will,  
And makes us rather bear those ills we have  
Than fly to others that we know not of?<sup>(9)</sup>

これは、ハムレット (*Hamlet*)、第3幕第1場からの引用である。

こういう先例があるとしたら、野心家の文法学者はいったいどうするだろうか。逆に、

文は常に前置詞で終えるべきであると主張するであろうか。それではあまりに極端すぎる。時には、ドライデンの考え方が正しいこともある。ただし、時にそういうことがある、というにすぎないのである。次のような例を考えてみよう。

**That's the place which I'd like to spend as much of my retirement as possible in.**

退職後できるだけ過ごしたいと思っているのがあの場所です。

この文が言い易いと考えer人は、いないだろう。Possible のところまで、リズムはきわめて軽快に躍動しているが、その後、ドスンとところげ落ちる感じなのである。次のように言い換えた方が、受け入れ易い。

**That is the place in which I would like to spend as much of my retirement as possible.**

しかし、これはいささか改まった、堅苦しい (formal) 表現である。もし、そのような響きを与えたくないとしたら、どうすればいいか。その場合は、たとえば where を使って、次のように言い換えなければならない。

**That's the place where I'd like to spend as much of my retirement as possible.**

ついでながら、文末に前置詞を置くことにより生ずるぎこちなさは、文の長さを縮めることによって減らすことができる、ということも付け加えておこう。次のように換えると、さほど言いにくいという感じはなくなる。

**That's the place which I'd like to spend my retirement in.**

そして、さらに文を短くすると、ぎこちなさは殆ど解消してしまう。

**That's the place to spend retirement in!**

以上の例から明らかになったであろうが、文の中のどこに前置詞を置くべきかという問題に対しては、イエス或はノー (yes/no) というような単純な答は出せないのである。われわれの言葉の使い方というものは、われわれが話をしている状況を構成している、様々な微妙な要素の影響下にある。とりわけ、状況の堅苦しさ (formality) の度合の影響が著しい。たとえば

**That's the hotel I stayed in.**

あれが私の泊まったホテルです。

という表現を使ったとしたら、おそらくくだけたおしゃべりをしているのであろう。一方、

**That's the hotel in which I stayed.**

という表現を使ったとしたら、改まった (formal) 状況で話をしている可能性が濃い。さきほどの言葉と比べて、より慎重な、より考えぬかれた、よりまとまりのある表現という印象を与える。ネクタイをしめて、或はまた、制服を身にまとして話される言葉である。次にあげる例も同様である。

**The prisoner left his chair, on which he had been sitting, and proceeded towards the curtains, behind which he had seen the body...**

囚人は腰かけていた椅子を離れ、カーテンの方へ向かった。カーテンの裏側に死体が

あるのを目撃していたからである…

もちろん、公的文書の中では、この種の構文はさほど目立たない。公的文書中の文章は、構成も整い、充分配慮の行き届いたものだ、と考えられているからである。しかしながら、話し言葉 (speech) においては、これにふさわしい改まった (formal) 場でない限り、聞く人に学者ぶって堅苦しい印象を与えることになろう。

逆のことも言える。即ち、文末にいつも前置詞を置いたとしても、口語的な話し言葉 (colloquial speech) の場合には目立たない。しかし、改まった (formal) 話し言葉の文体 (speaking styles) においては、くだけすぎという印象を与えかねないし、書き言葉 (written English) においては、ぞんざいだと批判されることが多い。

われわれがとるべき態度は、はっきりしている。これは、是か非かという二者択一の問題ではないのである。改まった文体 (formal style) も、くだけた文体 (informal style) も共に、われわれの生活の中で働くべき場所を持っているのである。われわれは、その場の堅苦しさ (formality) の程度に応じて衣服を着替えるが、言語習慣についても同様なことがいえる。或は、そうでなければならぬのである。われわれの頭の中には、だれでも、言語の衣装だながあり、その中には、文の様々な文体 (style) の見事な蒐集物 (collection) が収められている。だから、どんな状況になっても、その蒐集物中のただ1点しか使用しないとしたら、とてももったいないことなのである。

(訳者注)

- (1) この章の原題は、'Is this something up with which we must put?' (これは、われわれが我慢しなければいけないものなのか?) である。
- (2) この章の原題のこと。注(1)参照。
- (3) ドライデンがどこで、この 'not elegant' という表現を用いたかはっきりしないが、'A sentence ending in a preposition is an inelegant sentence.' (前置詞で終わる文は洗練されていない) というのが、当時の一般的考え方であったようだ。  
(H.W. Fowler, *A Dictionary of Modern English Usage*, 2nd ed. revised by E. Gowers, Oxford: Clarendon Press, 1965, pp. 473 ff. を参照。なお、以下本書を *MEU* と略す。)

- (4) ドライデンの *Defence of the Epilogue; or, An Essay on the Dramatic Poetry of the Last Age* (1672) のなかに、次のような文章がある。

The preposition in the end of the sentence; a common fault...; and which I have but lately observed in my own writings.

W.P. Ker (ed.), *Essays of John Dryden*, Vol. 1, New York, Russell & Russell, 1961, p. 168.

文末の前置詞。これはよくある間違いで、私もつい最近、自分の文章の中にあることに気づいたばかりだ。

- (5) これは *An Essay of Dramatick Poesie* (1668) の中の表現である。この作品は、1684年に第2版、さらに1693年に第3版が出されている。ちなみに、これと同じ意図

に基づく修正箇所を第2版、第3版で数えてみると、どちらの版でも、この箇所を含めて12ヶ所に及んでいる。(注④ *Essays of John Dryden* を参照)

- (6) Lindley Murray, *English Grammar, adapted to the Different Classes of Learners* (1795) のことであろう。教科書として意図され、著者みずから大した期待をかけていなかったが、1850年までに200版、1,500,000または2,000,000部売り尽くすほどの売れ行きであったという。代表的な規範文法書といえよう。(松浪有・池上嘉彦・今井邦彦編『大修館英語学事典』、大修館書店、1983年、pp. 431 ff.)

わが国に Murray のこの本が、幕末に渋川敬直重訳の『英文鑑』として導入された経緯については、豊田実『日本英学史の研究』(岩波書店 昭13、千城書房 昭38、三「英文法紹介及び研究の歴史」)が詳述しており、参考になる。

- (7) H.W. Fowler (*MEU*, pp. 473—74) によると、ギボン(イギリスの有名な歴史家、Edward Gibbon, 1737—94) のことであろう) はドライデン等の考えをさらに一步進めて、前置詞と混同しやすい副詞 (*on, over, under, etc.*) も文末に置かない方が無難であると主張したらしい。

Gibbon improved upon the doctrine, and, observing that prepositions and adverbs are not always easily distinguished, kept on the safe side by not ending sentences with *on, over, under, or the like*, even when they would have been adverbs.

このような意味で Fowler は、この文法観の流れを Dryden-Gibbon tradition と形容している。(MEU, p. 470)

- (8) ドライデン自身に、次のような発言があるらしい。(MEU, p. 473)

I am often put to a stand in considering whether what I write be the idiom of the tongue,...and have no other way to clear my doubts but by translating my English into Latin.

私の書いている文章が英語の慣用的な表現なのかどうか考えても、判断に迷うことが多い。…結局、自分の英語をラテン語に訳しかえて疑問を晴らすしか方法がないのだ。

- (9) *The Penguin Dictionary of Surnames*, 2nd ed. (1979) によれば、Cholmondley (〔tʃɒmlɪ]) は Cholmondeley とも記され、Delamere 男爵の family name だという。Cheshire の地名にもあるということである。また、Minor は、イギリスのパブリック・スクールにおける古い用法で、特に同一学校に在籍中の兄弟のうち、弟の方を指すらしい (*Longman Dictionary of Contemporary English*, 1978 を参照)。

Cholmondley Minor は、ここでは、保守的で頑迷固陋な人物としてそのような姓名をあげて、皮肉ったものではないかと思われる。

- (10) 'Down on' はこの場合、句動詞 (phrasal verb) cut down on の構成要素と考えられる。これに関しては、Fowler (*MEU*, p. 475) の次の助言が参考になる。

If the 'preposition' is in fact the adverbial particle of a PHRASAL VERB, no choice is open to us; it cannot be wrested from its partner.

Not even Dryden could have altered *which I will not put up with to up with which I will not put.*

前置詞というものが<句動詞>を構成する副詞に付いた小辞である場合には、選択の余地はない。その結合相手と切り離すことはできないのである。ドライデンでも *which I will not put up with* を *up with which I will not put* と書き換えることはできなかったであろう。

(11) 注(1)参照。

(12) Fowler (*MEU*, p. 474) はこのような態度から、逆にごちない文が作られることが多いと述べ、この現象を 'out of the frying pan' と形容している(この言葉の意味は、Fowler 自身の解説によると、文章上の間違いの原因は、無知でも不注意でもない。その殆ど大部分は、文法上或は文体上誤りとされる表現、又はそのように誤解されている表現を避けようとするために起きる、ということである)。

In avoiding the forbidden order, unskilful handlers of words often fall into real blunders.

彼の列挙している blunder (大失敗) の例のうち、1つだけ示しておこう(括弧の中が元の表現である)。

It is like the art of which Huysmans dreamed but never executed  
(the art that Huysmans dreamed of).

それは、ホイスマンスが夢にはみても、決して成しとげることのできなかった芸術に似ている。

(13) Sir Ernest Gowers, *The Complete Plain Words*, 2nd ed. revised by Sir Bruce Fraser, Penguin Books, 1985, p. 186. 訳者には意味がよく分からないが、最近出た注釈書によると、'What did you bring up that book which people don't like to read aloud me for?' と言い換えてあり、「みんなが私に、声に出して読んで聞かせたくないと思っている本の話題を、あなたはどのように持ち出したのか?」という意味か。(米倉緯・飯田秀敏編注『クリスタル：現代英語を語る』英潮社新社、1985年 を参照)

(14) 拙訳を試みると、次のようになるであろう。

最近、私は前置詞を失くした、  
それは椅子の下に隠れている気配がした  
そこで私は腹立ちまぎれに叫んだ、  
「ばち当りめ! その下から出てこい」と。

正確ということが私の信条だ、

あやふやな表現は嫌いだ、

にも拘らず私は考えた、

「なんのために、その下から出てこなくてはならないのか」と。

(15) Before Dryden の略。B.C. (Before Christ) を意識したものであろう。



- (16) After Dryden の略。A.D. (Anno Domini) を意識して、しゃれたもの。  
(17) Fowler (MEU) によると、古くは14世紀のチョーサー (Chaucer) に既にその例があり、それ以降今日まで600年以上にわたり、殆ど全ての大作家にその例があるということである。

- (18) 関係詞を省略して前置詞を後に置くという、英語の驚くべき自由な精神は、この言語のもつ柔軟性の重要な要素である、と Fowler は述べている。

The fact is that the remarkable freedom enjoyed by English in putting its prepositions late and omitting its relatives is an important element in the flexibility of the language. (MEU, p. 474)

- (19) 「このような重荷をだれががまんするか…

つらい人生をうめきながら汗水流して歩むのも、

ただ死後にくるものを恐れるためだ。

死後の世界は未知の国だ、旅立ったものは1人として

もどつたためしがない。それで決心がにぶるのだ。

見も知らぬあの世の苦勞に飛びこむよりは、

慣れたこの世のわずらいをがまんしようと思うのだ。」

(小田島雄志訳)

他に、古くは坪内逍遙、また近年では福田恒存等の訳業がある。

- (20) 参考までに、この問題に対する Fowler (MEU) の助言を紹介しておこう。

「決して恣意的な規則に従ってはいけない。大てい、いくつか配列可能な方法があり、その中で意識的に選択を行うのである。前置詞が自然に最後に来て、それが耳ざわりがよいとすれば、そこから動かさないことだ。耳ざわりがよくなっても、それを補うほどの力強さが感じられれば、そのままにしておくことだ。或は又、色々ぎこちない表現が可能な中で、ぎこちなさが最も少ない場合も同様である。(以下、注(10)の文章が続く)」

D.クリスタル教授も、Dryden-Gibbon tradition (注(7)参照) のような規範主義の立場はとらないという意味で、Fowler の立場に近いといえよう。ただ、時代的違いもあって当然の事ではあるが、Fowler には社会言語学 (sociolinguistics) 的な発想はみられない。D.クリスタル教授の場合は、改まった (formal) スタイルとくだけた (informal) スタイルの区別及びその言葉を使う場面 (social context) に対する意識が明瞭である点など、現代の社会言語学的立場に立った発言である。

- (21) 英語に限らず、どの言語の研究においても、従来その研究対象となってきたのは、主として〈書きことば〉であって、それに較べると〈話しことば〉の研究は立ち遅れていた。或は、不当に無視されてきたといっても過言ではないであろう。ところが近年、言語の科学的研究が進むにつれて、多くの言語学者の目が、これまで等閑視されていた〈話しことば〉へ向けられるようになってきた。その研究成果は目覚ましいものがあり、言語研究の分野におけるこの空白部分が、徐々にではあるが着実に埋められつつある。

言葉には、大雑把にいうと、〈改まった〉(formal) 文体と〈くだけた〉(informal) 文体がある。いや、より正確に表現するならば、最も〈改まった〉文体と、最も〈くだけた〉文体を両極とする物差しのようなもので、この両極の間に、堅苦しさ (formality) の度合に応じて、様々な文体が考えられるわけである。しかも、そのどちらかが秀れていて、どちらかが劣っている、という性質のものではなく、いずれも独自の存在価値を有するものなのである。

われわれのように、外国語として英語を教える立場にあるものにとっては、とくにこの点をはっきりと認識することが、肝要である。すなわち、学習者に将来様々な場面で、それぞれの〈場〉にふさわしい文体を使いわけることができる能力を持たせてやるためには、教授者としては、これまでのように〈改まった〉文体だけを教えることで事足りてしていたので不十分或は不適切なのであって、〈くだけた〉文体に習熟させてやることにも、それと同程度の力を注ぐことが、極めて重要なことなのである。〈改まった〉文体を知って使いこなすためには、〈くだけた〉文体を知ることが必要なことであるし、〈くだけた〉文体を知って使いこなすためには、〈改まった〉文体に対する理解が欠かせないのである。かくして、学習者は将来、その〈場〉の堅苦しさ (formality) の度合に応じて、それぞれにふさわしい文体を選択し、それを使いこなすことが可能になろう。

レディング大学における講演で、D. クリスタル教授が特に強調されたのも、この点であったように思う。